

六月の初め、内海啓太は冷凍庫を買った。夕方の五時には配送ができるという話だったが、電器店の配達アパートに来たのは、夜も八時を回ってからだった。

「こんな時間になっちゃって悪いね。今月に入ってからエアコンの設置が多くて、あれがけっこう手間取るんだよ」

四十半ば過ぎ、男は脂ぎった顔に愛想笑いを浮かべた。

「お客さん、一人暮らし？」

啓太は無言のまま、浅く頷いた。

「ひよっとして、釣りが趣味とか」

「いいえ」

男はレンジの脇に冷凍庫を設置すると、額の汗を薄緑色の作業着の袖口で拭った。

「冷凍庫を買う人は珍しいんだよ。買っても鮮魚店カレストランとかそういうところで。前も一般のお客さんで冷凍庫を買った人がいたけど、その人は釣りが趣味で、釣った魚を凍らせて記念にとつとくんだったって言ってたなあ。……ところでお客さんはコレ、何に使うの？」

やや間を置いて「冷凍食品が好きなんで」とボソリと呟く。サインした領収書を手「若いうちからそんなモンばかり食ってちゃ体に悪いよ」と男は肩を竦めた。

本当のことを話したら、目の前の男の顔がどう変化するのか興味はあった。けれど計画が想像通りに実行された場合、ここでの一言が後々面倒なことに繋がりがねない。

警察官を前にして、男は証言するのだろう。脂ぎった顔を紅潮させ、社会悪に対する嫌悪を言葉尻に滲ませながら、目だけは興味本位に輝かせて。

「最初は冗談かと思ったんだよ。だつてさ、冷凍庫を買ったのが人を凍らせておくためだなんて言われても、普通は誰も信じないでしょ」

日が落ちても、気温はさして変わらなかった。繁華街の、毒虫のような禍々しい明るさは、夏の夜の蒸し暑さを増幅させる。歩いているだけで、額や背中にじわりと汗が滲む。デイパックが肩に食い込んで重たい。教科書にバインダー……いっそ捨ててしまおうかと投げやりな気持ちになつたけど、これがないと明日からの授業が困ると冷静な自分が囁いて思い留まった。

大通りから左の路地に入ると、周囲の雰囲気ガラリと変わった。明かりの数が減り、男の歩いている比率が高くなる。

「向こうの通り、そのテの店が多いので有名なんだよ。まあ、新宿の二丁目ほどじゃないけどね」

以前、ある男が教えてくれた。興味がなかったといえど嘘になるが、物珍しさの域を超えるものではなかった。パートナーのいる自分には、男が男を漁る歓楽街など関係ないと思つていた。そもそも自分は男が好きなのではなく、彼という存在を愛しているのだというプライドがあった。腹の底から笑いが込み上げてきてフツと鼻が鳴る。愛を大義名分にしていた自分が今、何をしているのか。一晚、寢床を確保してくれる相手を探している。泊めてくれるなら、セックス込みでもいい。

正直に言うとはセックスは好きじゃない。痛いし、ようやく勃起したかと思えばすぐに射精してしまう。快感が持続しない。タイミングも合わず、自分はイッても相手がなかなか射精しないので、それに付き合うのが苦痛だった。「声を出せよ」と言われて、無理に感じている振りをする。思い出すだけで虚しくな

る。快感は求めていない。泊めてくれるなら、相手は誰でもいい。もちろん感情はいらぬ。自堕落な行為に何を求める？ きつと自分は駄目になりたい、壊れたんじゃないだろうか。

軽い衝撃。すれ違った人と、腕の先がぶつかる。湿った肌の感触に、背筋がゾッと粟あわ立たった。

「すみません」

口先だけで謝った。頭の中は、嫌悪感の名残が嫌な感じに貼りついてる。

「こつちこそごめんよ」

五十前後だろうか、肥満気味の中年のサラリーマンは、酔っているのか充血した赤い目をしていて。

「君、学生？」

粘ついた声。不躰ぶしつぽで舐めるような視線が上から下へ向かってゆつくりと動く。

「ええ、まあ」

「ボクとどっか行かない。何でも好きなものを食べさせてあげるよ」

腹は減っていないし、自分を「ボク」と言う中年にも興味はない。泊めてくれるなら誰とでもセックスできると思っていたけれど、こいつだけは嫌だ。生理的に。

「ねえ、行こうよ」

湿った手のひらが、啓太の二の腕に食い込む。魚のようにヌルリとした感触にギョッとして、乱暴に払いた。一本ネジが外れたような男の間抜け面が、瞬きする間に豹変する。目尻が釣り上がり、中途半端にひらいた口許から、チツと舌打ちが漏れた。

「大したツラでもねえくせに、選り好みしてんじゃねえよ」

大きな声に、近くを歩いていた数人が振り返る。男は道端にペッと唾を吐き捨てると、啓太を一瞥し歩

き去った。あからさまな好意と侮蔑。とてもわかりやすい。一分……二分も立ち止まっていると、そこには自分を誘った男はもろろん、振り返った通行人すら見えなくなった。全てが流れ、消えていく。最初から何事もなかったように。

再び足を動かす。ひたすら行きながら、どうして自分はこのように一生懸命に歩いているんだろうと考える。疲れてきたし、喉も渴いた。どこかに座りたい、何か飲みたい。衝動だけで右手にあつたバーのドアを押しした。

「いらっしやいませ」

店内は薄暗く、中はそう広くない。長いカウンターテーブルの他に丸テーブルが五つ。客は七、八人で、壁際に立ったまま話をしている男もいる。足を踏み入れた途端、店の中にいる客が全員自分を見ているような気がして躊躇ためらった。落ち着かない。けれどここを出て新しい店を探すのも面倒で、足早にカウンターに向かった。スツールに腰掛け、視線が見えなくなると、幾分気持ちが楽になる。店内に流れている音楽は古い。六十年代の洋楽は、どうしてもどれも悲しい気配がするのだろう。

「いらっしやいませ」

カウンターの向こうから、パーテンダーが声をかけてくる。三十過ぎだろうか、彫りの深い整った顔立ちで、顎先の薄い髭が似合っている。この男が誘ってくれるなら、寝てもいいような気がする。

「ご注文は何にしますか？」

「ビール」

男が視界から消える。啓太はカウンターに両肘をついて、これまでの経過を頭の中でまとめようとした。歩いているうちに、よくわからなくなったからだ。

「ねえ、君？」

振り返ると、半袖シャツとストラックス姿の男が背後に立っていた。年は自分よりも少し上ぐらい。中肉中背でのっぺりした顔をしている。目も小さくて、左右の距離が遠い。小学生の頃、通学途中の道端に捨て置かれていたフナを思い出した。今と同じ、蒸し暑い夏の日だった。しゃがんで覗き込むと、白く濁ったフナの目玉から蛆が這い出してきて驚いた。

「誰かと待ち合わせ？」

啓太は首を横に振る。男は空いていた隣の席にいそいそと腰掛け、フナの顔で「君、かわいいね」と微笑みかけてきた。注文したビールが手許に置かれる。それに気を取られた振り、フナを無視した。

「この店、初めて？」

肩に手を置かれ、馴れ馴れしさに虫酸が走った。もう一度、男の顔を見る。どんなに目を凝らしても、そこにいるのは「フナ」だ。人間に見えなくなってきた。

「ごめん」

肩に置かれた手をそっけなく引き離れた。

「ごめんだけじゃわからないよ。君、顔が青いね。気分が悪いなら、どこか別のところに行って休む？」積極的に強引なフナの目が、淫猥な形に細められる。いつそ店を出ようかと腰を浮かした時だった。

「若槻さん、ちよつといい？」

啓太の注文を受けたバーテンダーがカウンターから出てきて、フナの顔をした男を店の隅に連れていった。ほどなくバーテンダーだけが啓太の傍にやつてくる。

「一つ聞いてもいいかな？」

バーテンダーは啓太の表情を窺いながら聞いてきた。

「この店、初めてだよ」

頷く。

「はつきり言うと、この店はゲイが多いんだよ。それは知ってた？」

「はい」

バーテンダーは安堵したようにフッと息をついた。

「うちは常連がほとんどで客筋悪くないけど、タイプじゃない相手からのアプローチは最初にはつきりと断った方がいい。待ち合わせをしているとか、理由はなんでもいいから。そういうのが暗黙のルールになっているから」

「すみません。もう帰ります」

バーテンダーが慌てて右手を振った。

「そういうつもりで言ったんじゃないよ。ただ君が何も知らないんじゃないかと思って気になったんだ。店の雰囲気は嫌でなかったら、ゆっくりしておいで。一人でも大歓迎だし、飲みただけのお客さんも多いからね」

店を出ていくかどうか迷ったけれど、半分以上残っているビールに引き止められる。一杯だけで帰るつもりでグラスを手を取った。残りのビールを飲んでいううちに、またわからなくなった。自分が見知らぬゲイバーでビールを飲んでいる理由。……そう、アパートに帰れないからだ。なぜ帰れないのか……死体があるからだ。